

プロジェクト活動に見られる表現の多様性について
—保育所4・5歳児クラスでの造形表現活動からの一考察—

豊 泉 尚 美

The importance of children's creative expressions formed by
various projects and activities.

Naomi Toyoizumi

研究目的

子どもの表現力を最大限に尊重しようとする、イタリアのレッジョ・エミリア市（Reggio Emilia）の幼児教育を特徴づける「プロジェクト活動」（注1）を参考としながら、子ども主体の造形表現の多様性が引き出される保育環境のありかたについて、実践を通して検証し考察する。

研究・実践方法

筆者はレッジョ・エミリア市の幼児教育に関する文献資料、現地での研修及び調査等を参考にしつつ、平成26年度より公立保育所（埼玉県狭山市）の公開保育（注2）において、6園でプロジェクト活動を行ってきた。その中から今回は2箇所を選び（平成26,28年度）、4・5歳児クラスにおいて、担任保育者と共に行ったプロジェクト活動の実践について考察する。

本論ではその活動のプロセスを追いつつ、子どもたちの表現の多様性を確認した。子どもと保育者との対話や作品から、人と人、人とモノ（造形素材・作品）の関係性の変化を主に参加した保育者の振り返りから捉える。

尚、プロジェクト活動は、毎日決められた時間に、あるいは指導計画案に基づいて行うのではなく（注3）、子どもたちの日々の様子を見ながら、子どもたちの興味、関心がクラスのプロジェクト活動のテーマに向かっている、と担任が判断した折に間歇的に行われた。その期間はクラスによって異なる結果になったが、各園概ね8～10か月間に及んだ。

筆者は、レッジョ・エミリアの幼児教育における土台が、何より子どもの権利を保障していること、そして子どもの多様な表現を最大限に尊重していることである、と捉えている。（注4）そしてレッジョ・エミリアで子どもは幼児学校での生活とその創造に関わる主人公である、と考えられている。子どもは可能性に溢れており、有能であって、自ら環境に働きかけ、自分に合った物事のとらえ方を見出し表現する能力をもっているとされ、子ども自らが「やってみたい、知りたい」という意欲こそが一人一人の学びを形成する、と認識されている。

尚、レッジョ・エミリアの教育の特徴として、アトリエリスタ（Atelierista）と呼ばれる、アトリエで子どもたちの多様な表現活動を支援する専門家がいる。

アトリエリスタは、1960年代から子どもの創造的想像力と知識を豊かにする大切な協力者として、各園に配置されてきた。（注5）

筆者が関わってきた保育園では、園内で行うプロジェクトを保護者や地域の連携にまで広げることではできなかった。また保育園には「アトリエ」もなく、アトリエリスタとして園に常駐することも叶わず、子どもたちとも限定された関わりに止まっているのが現状である。しかしそうした状況の中でも、筆者は保育所において以下のような、アトリエリス

タに準じる活動に努めてきた。

- ・造形表現活動の実践に新たな方向性を見いだすよう努める。
- ・教師と話し合いを重ね、子どもが様々な方法で自分の思いを表現するスキルを身に付け、その幅を広げる援助をする。
- ・保育者に対してドキュメンテーション作成の助言を行う。
- ・保育のアートスキル向上のための職員研修を担当する。

今回は、レッジョ・エミリアの幼児教育において、もっとも特徴的といえる「プロジェクト活動 (Progettazione)」と「ドキュメンテーション Documentazione」を中心として実践研究を行った。

「プロジェクト活動」を子どもの興味関心から始まり観察を基にして、子どもの考えを引き出し、共に探求を広げ深める営み、学び合う活動をデザインするプロセスと捉え、「ドキュメンテーション」は達成や結果を示すための記録ではなく、子ども同士・教職員・保護者・地域の人々の理解を深めるために「共同的に学ぶ」構成要素として、レッジョ・エミリアでよく言われているような「壁が語る」ものと捉えた。

以上のレッジョ・エミリアの幼児教育の特徴について、所長と担任とも共通理解をした上で、プロジェクト活動を開始した。(尚、公開保育の際は各回参加した保育者に対しても以上の概略を説明した。) その活動の過程と結果について次に述べる。

【注 1】 プロジェクト活動

保育における「プロジェクト」の歴史は、20 世紀初頭にもともと社会人教育の理論から、J. デューイ (John Dewey 1859-1952) やキルパトリック (William H. Kilpatrick 1871-1965) が提唱したことに端を発するが、本論では、第二次大戦後母親や教師たちが中心となり、ローリス・マラグッツィ (Loris Malaguzzi 1920-1994) を迎えて幼児期の教育として導入した、北イタリアのレッジョ・エミリア市での「プロジェクト」の実践を参考として、保育における「プロジェクト」活動の意義について考察する。

【注 2】 公開保育

埼玉県狭山市内にあるすべての公立保育所から 1 人ずつ保育士が公開保育に参加した。

プロジェクト活動は、公開保育を担当するクラスで約 8 ヶ月～10 か月にわたって行われたが、その間に 2 回の公開保育があり、参加した保育者と担任が活動中のプロジェクトについて協同的に学ぶ。

【注 3】 エマージェントカリキュラム (emergent curriculum)

大人が子どもの予定行動を決めているような保育課程 (カリキュラム) や指導計画案は不要であるとし、子どもたちの興味関心が面白いことにつながり、思わぬ発見や法則をそ

のつど子ども自ら見出すことを促す。レッジョ・エミリアの幼児教育の特徴のひとつである。教師は活動がどのように進むのかわからないリスクを自覚しつつ、「何だろう？不思議だな？やってみよう！」という子どもの意欲を大切にする。

【注 4】

子どもの表現の豊かさとそれを尊重する姿勢については、レッジョ・エミリアの幼児教育を率いてきた教育学者ローリス・マラグッツィの詩「子どもたちの 100 のことば」(I cento linguaggi dei bambini) にもよく表されている。

【注 5】

レッジョ・エミリアの幼児学校には、アトリエリスタの他に、1970 年代より「ペダゴジスタ」(Pedagogista) が定期的に派遣され、幼児学校の運営や実践に対する責任を負って助言している。彼らは地域ごとにそれぞれ 5,6 園の乳児保育所、幼児学校を担当して巡回し、全体の実践の質の保持について語り合うと共に、園内のドキュメンテーションにも関わる。

結果・考察

それぞれの園での活動期間が長く、活動のプロセス也多岐にわたるため、すべての制作過程作品、保育者の関わり等について詳細を述べることはできないが、活動の象徴的な場面や保育者のことばを抽出して概要をまとめることとする。

<プロジェクト活動を行った 3 園の活動リスト>

	1 K 保育所	2 M 保育所
クラス	5 歳児 (24 名)	5 歳児 (18 名)
活動期間	平成 26 年 5 月～ 27 年 2 月	平成 27 年 4 月～ 28 年 3 月
テーマ 子どもの関心	しずくの旅(水のゆくえ)	ことば(気持ちを伝えること)
保育所の かかわり方	クラス担任のみで活動	保育所全体でテーマを共有

1. K保育所 (5歳児クラス 24名)

梅雨時に降り続く雨と水道の蛇口からしたたるしずくへの子どもたちの関心から始まった5歳児クラスのプロジェクト活動

*体験をしたこと、その結果として様々に表現されたもの

屋外

- ・砂場での「川」づくり・雨上がりの園庭にできた水たまりをつなげる遊び
(水の流れかた・水が土にしみ込むことを認識する)
- ・園庭での色水あそび(絵の具と水の量のバランスで色を変える試み)
- ・園庭で子どもたちは傘をさし、保育士がホースで水をかけて水の音を聞く。

屋内

- ・フィンガーペイント(コーンスターチと絵の具と水を使って)
- ・金魚の水替え当番をきっかけにして「澄んだ透明な水づくり」(濾過の試み)へ
- ・畑の野菜を描く。(雨が降っていて畑に行けない日に、「畑の作物は喜んでいるね」と想像する対話などから、子どもたちは「水は人間にも動物にも生きるために大切である」という実感をもって描いていた。)
- ・『いろいきている』谷川俊太郎さく・元永定正え(福音館書店 2008)の読み聞かせを経て、同じような技法(垂らし・にじみ)に挑戦して色を描く。その後、各自の絵に言葉を添えて、クラスの絵本ができあがった。(Photo1・2)



Photo1

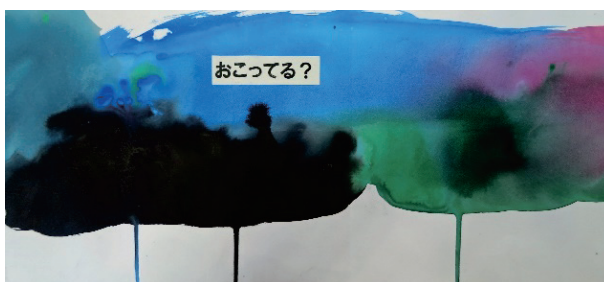


Photo2

- ・水の循環についての紙芝居にたいへん興味を示し、理解を深めた子どもたちは、「水が循環する町づくり」の制作に向かい（Photo3・4）、2月には劇表現として他の園児や保護者の前で演じた。



Photo3 雨雲から雨のしずくが落ち、
地面を潤して様々な生き物、
植物が育つ様子



Photo4 雲の中には妖精や海の中には
人魚がいたりする一方、
「浄水場」も描かれている。

以上がグループで話し合いながら完成した多様な作例のごく一部である。

次に公開保育後に参加者全員が記入した「保育者の振り返りシート」の結果を抜粋して分類し、プロジェクト活動に参加した保育者が子どもたちの変化に気づき、子どもの様子から学んだこと、実践の際の環境構成のありかたについてなどの考察を見ていく。

以下のように A,B,C に分類し、公開保育ごとに出た意見を番号順に並べる。

- A プロジェクト活動に参加・観察した保育者が気づき・学んだこと
- B 実践するさいの環境構成について
- C プロジェクト活動の過程での子どもたちの変化

A プロジェクト活動に参加・観察した保育者が気づき・学んだこと

- A1 （担任）アトリエリスタ（講師）との打ち合わせの中で大切にしたい、と常に思ったことは、子どもたちが主体的に考えたり、作ったり、試すことができること、やりたいと思うことを自力でできること、それに保育者がどう関わっていくか準備をすることについてだった。

担任だからこそわかる子どもの興味や関心、認識をより深めていけるように、子どもの言葉に耳を傾け、おとなの見通しをとりはらい、子どもが自ら考え、やりたいと思うことを追求しようと努めた。その結果、豊かな心と知的な表現方法である造形と保育には深いつながりと共通点があることに気づくことができた。

- A2 水と親しんだ子どもたちが、机の上で細やかな筆使いで絵を描き、その絵に対する

一人一人の言葉を添えて完成した絵本をみた時には、子どもの感性ってなんてすごいのだろうと思った。さらにエコや水の循環について一生懸命考える子どもたちに、5歳児でここまで思いを巡らせることができるのか、と感心させられた。

A3 以前大学の授業で聞いたレッジョ・エミリアの保育に感銘を受け、興味を持っていた。けれども保育のシステムや環境など、日本と異なることが多く、難しさを感じていたが、子どもが主体的に行動し学んでいくということは、行政上の保育システムは異なっている、こうして取り入れることができることを学んだ。

A4 「プロジェクトアプローチ」という言葉を初めて聞き、公開保育が楽しみだった。

当日子どもたちは、ドリッピングやにじみ絵という、初めての経験に苦戦する子どももいたが、大人の手を借りずに自分でできる方法を見つけ出したり、友達の姿を見てまねをしたりして、解決する道を自分で切り開いていた。

そのような姿を見て、私は日々の保育のなかで、失敗しないための声や手のかけ過ぎを反省した。子どもたちの力を信じ、引き出していくことの大切さ、子どもたちの興味関心に気づき、それを一緒に追いながら、子どもたちが主体的に進めることの大切さを改めて学んだ。

A5 表現したい子どもの欲求をかなえられるように、保育士はたくさんの表現方法を子どもたちが経験できるようにすることが大切であることを再確認した。

日々の保育でいかに子どもからの自由な発想を引き出し、それを認め共感していくのか、ということを今回実際の保育を見る中で学んだ。「協同的な学び」は、保育者の高い意識と温かい心で実践されると強く感じた公開保育だった。

B 実践するさいの環境構成について

B1 (担任) 水に関するプロジェクト「しずくの旅」をアトリエリスタ(講師)と共にくもの巣状に図示したり、ドキュメンテーションを作成したことで、水を中心に関わる保育のプロセスを整理したり、見直すのがとてもわかりやすくなった。

B2 「道具が使える手になる」よう、いろいろな経験を小さいうちから年齢に合わせて楽しんでいく環境を整えることが大事だと改めて実感した。そうしてこそ年齢が上になって自分の発想を表現する楽しさがわかるようになると思う。

C プロジェクト活動の過程での子どもたちの変化

- C1 2度目の公開保育に参加して、水の循環図作りや色水遊びでは、大人が考えつかない発想が生まれていて驚かされた。またグループで話し合ったことや自分の思いを伝える方法は発言だけでなく様々な方法があることを子どもたちは1回目よりはるかに理解していた。
- C2 2度目の公開保育では、子どもたちはそれぞれ自分の感情を色で豊かに表現していて、その色に自分の気持ちを表す言葉を発していた。バケツに水を入れて運び、人数分の筆や必要な数のパレット、ぞうきをそろえる、など活動準備のところから子どもたちが進んで行い、道具の扱いにとっても慣れている様子に驚いた。造形活動の積み重ねを感じる。
- C3 プロジェクト活動では、まずクラスの子どもたちとじっくり向き合って、子どものつぶやきや発見を大切に、興味をもっていることをテーマに造形表現活動を行うことが大切だと知った。今までは季節を意識しながら制作活動を行うことが多く、きれいに完成させたい、飾りたいという思いが保育者である自分の中にあったことに気づき、それだけでは子どもたちが楽しみきれないことや子ども自身の成長も少ないのだと感じた。保育していると時間に追われることもあり、困っている子どもにどうしてもすぐ声をかけたり教えたりしがちになる。今回子どもの姿をじっくり見ることで、子どもたちは一人一人考えたり、周りをよく見ており、時間がかかっても自分で成し遂げられるということを知ることができた。

アトリエリスタ（講師）と担任の気づき

もともと積極的な自己表現が苦手な子が多く、子どもたちの一人一人から意見をどう引き出していくか工夫が必要なクラスだったが、長い期間にわたるプロジェクト活動を経て、クラスが大きく変化した。

子どもたちの協同は、行事を通してできてきた。また「しずくの旅」をテーマとしたプロジェクトの中で、水を大切にすることから始まり、日頃の生活の中で意識できるものはないか、と考え合い、たとえばティッシュの使いすぎや、水の出しっ放し、本の破れなど、モノを大切に使う意識を思ってもらいたい、という保育者の願いも伝わった。

ある母親から、「子どもが洗濯機の注水音を聞いて、ママが水の出しっ放ししてるのかと思った」と注意を促され、わが子の発言に驚いたと担任に知らされた。

こうしてプロジェクトを通して子どもたちが、水を大切にすることは、森を大切にすること、命とつながっていることを理解したようだった。

2. M保育所 (5歳児クラス 18名)

「子どもたちがそれぞれの言葉を見つけていくプロジェクト」

このクラスでは、子どもたちの言葉が時として荒っぽく、ぞんざいであることが担任2人にとっては年度当初から気になっていた。言葉で表現することが苦手で、怒りの感情などに駆られて、すぐ手を出してしまう子も数人いることを心配していた担任が、「ことばを大切にしてほしい」という思い、出発したという点では、本来のプロジェクトとは異なるかもしれない。担任は初めに子どもたちが「ことば」に気づくきっかけを作った。(例: 井上ひさし作詞・釜石小学校校歌「いきいきいきる」を皆で歌う。

ある日友達に「うざい」と言った子がいて、その言葉を言う側、言われる側の気持ちについて皆で話し合うなど) その後の「ことば」についての活動は、子ども主体の探索となり、様々な広がりをもって約8か月間にわたって繰り返し広げられた。

*体験を通して解釈したこと、その結果として様々な表現されたこと

- ・「親子プレイデイ」(保護者も参加する運動遊びの行事)の入場門制作

(お家の人に喜んでもらいたい、楽しいと思ってほしい、ありがとうって言いたい、という子どもたちの気持ちを込めて、思い思いのハートの形をコラージュした。)

(話し合いの例:「言葉ってどうしてあるの?」と保育者が聞いてみたことがあった。子どもたちはその問いに「人に気持ちを伝えるため」「自分の言いたいことを伝えるため」「挨拶」などと答えたという。そうした対話を繰り返している間に、クラスで共通の言葉として「ありがとう」を選び、その言葉を大切にしようということになった。)

- ・「オノマトペあそび」を行う。(雨の音に耳をすませている子どもたちに、「どんなふう聞こえる?」と担任が聞いた。その後「ぽつぽつ」「ザーザー」「バシャバシャ」など、子どもたちはそれぞれ発言した。「オノマトペ(注6)」で例えば雨の音を「ぽつぽつ」と言わずに体で表現してみて、見ている子たちがその音を当てるという遊びに展開していった。)

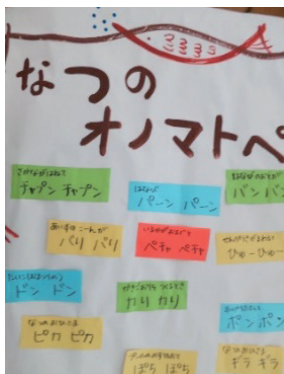


Photo 5 子どもたちのオノマトペ遊びの言葉を集めたもの



Photo6 おはなし会のポスター (1)



Photo7 おはなし会のポスター (2)

【注6】オノマトペ：モノが発する音や声を表す擬音語や、「きらきら」「くよくよ」など音を発しないものを感覚的に表す擬態語の総称

・「おはなし会」のポスター制作。何を描くか、何で描くかを相談して、各グループで協力して描いた。(Photo6・7)

・「おはなし会」とその後の描画 (Photo8・9)

ホールで、保育者たちがひとつずつ「すばなし」を持ち寄り、それぞれ子どもが描いたポスターの下で子どもたちを集めてお話をします。



Photo8 おはなし会の1コーナー



Photo9 おはなしの後に描いた絵

以下は、担任から保護者に向けてのお便りの一部である。

「そして（お話を）聞いた後、子どもたちはお礼に絵を描きました。

お話を想像しながら・・・それはそれはかわいらしい絵でした！

「夢みてみたいだったよ」「お話の世界に行けたよ」と、子どもたちはそのときの様子をお話してくれました。

当日楽しむことができたことはもちろん良かったのですが、何より楽しんだのはその日

を迎えるまでの日々でした。子どもたちは「お客さんを迎える」ことをわくわくしながら、「喜んでもらいたい気持ちで」準備しました。そして「ことば」を体で表現したり、聞いたことば（お話）を絵に描いたり、といった経験を通して、子どもたちは一人一人感じる
こと、表現することを存分に行っています！」

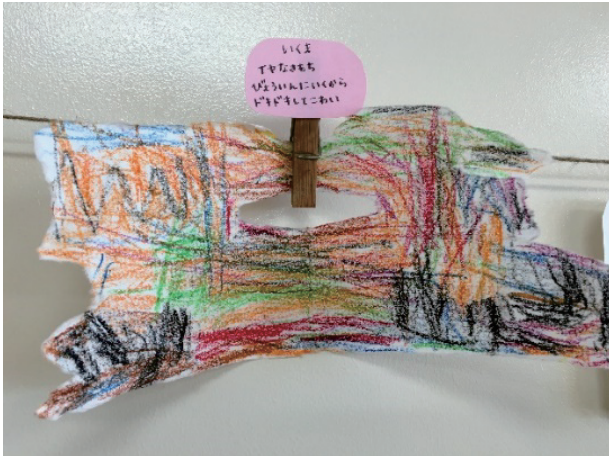


Photo10 病院に行くからドキドキして怖い



Photo11 悲しいなみだ

「朝ころんだの」

- ・「こころのかたち」を表現してみる。

登園してきた子どもたちの「朝のきもち」を和紙とクレヨンを使い、かたちを自由にちぎって貼り、表した。(Photo 10・11)

- ・「いろいろな自分のきもち」を様々な素材を使ってコラージュし、その後作品を掲げて、自分のきもちをどう表現したか発表した。(Photo 12・13)



Photo12



Photo13

- ・ハロウィンまつりの際には「お店屋さん」を企画し、様々なものづくりをした。

- ・「いろんな気もちの村人のおはなし」という「楽しい村・怒りんぼの村・悲しい村・嬉しい村」が出てくる劇が生まれた。お家の人に見せたい、という子どもたちの思いから、夏の祭りのさい保護者に向けてのびのびと演じられた。

A プロジェクト活動に参加した保育者の気づき・学んだこと

- A1 (主任) ことばが、どのように造形表現と結びつくのか最初はわからなかったが、子どもが言葉で遊んでいるうちに、楽しみながら積極的に造形的に表現している姿が見られた。保育者が教えるものではなく、「こうしたいな」「こうすればいいんだよ」という子どもの自発的な意見を取り入れながら保育を展開していくことの大切さを学んだ。
- A2 (担任Ⅰ)：保育の中でプロジェクトがどんなふうに関係されていくのか、本当にわくわくしながらスタートした。
子どもの発想のおもしろさ、保育者のきっかけ作り等のアドバイスをアトリエリスタから受け取り、行事を通して子どもと共感しながら思いを届けることができた実感している。公開保育はその延長線上にあり、子どもたちにとってその活動へ向かう準備がとても楽しく充実していた。
- A3 (担任Ⅱ) 保育者として伝えたい思いを押しつけず、子どもたちからの「ことば」に耳を傾けつつ、子どもの興味のあるような保育環境を整えて保育を進めてきた。その中で子どもはたくさんの思いを持ち、それを「ことば」で伝え合い、やってみたいことや子ども同士の関係の中で生まれる豊かなアイデアが集結して行動に移したときに、子どもの力の素晴らしさを実感した。それぞれの思いを素直に表現することのできる子どもの力は本当にすごいと思う。
- A4 公開保育を迎えるまでの様々な経験や表現を楽しんだことで、子どもたちは「作ることが楽しくて仕方ない」といった感じだった。廃材を利用してたべものやアクセサリを作り、お店屋さんで発展してハロウィンまつりに展開し、自分たちで作り上げたことが自信へとつながり「秋の音フェスティバル」となった。
子どもが自信をもって自主的に活動することこそが「子どもの自立につながる」ことを理解できたことは、保育者にとって財産だと思う。
- A5 子どもたちがどんなことに興味・関心があるのか。日頃子どもたちのつぶやきや行動をよく観察したり、遊びの中の様子を見たりしていくことが大切だと改めて感じた。自分の保育を振り返って見ると、経験してほしいことが先にあり、その活動にどのよ

うに興味をもってもらおうかということが先行していたように思う。今までの自分の活動の中で、助言ではなく誘導になっていなかったかと反省する点が多くある。こちらの意図する活動から外れそうになると軌道修正しようと保育士の関わりが多くなってしまったりもしていた。

子どもの主体性を尊重する大切さ、子どもが活動に自ら関わり興味・関心を持って参加しているか、遊んでいるか常に考えながら保育をしていきたいと思う。

保育者は子どもの力を信じる必要があると感じた。

A6 初めのうちは恥ずかしさや失敗への不安から、なかなか絵を描き出せない子が多かったのだが、おはなしの会で、子どもたちが保育者を真剣に見つめ、イメージを膨らませるために集中して言葉を聞き、その後にはためらうことなく絵を描いている姿を見て、子どもたちの表現方法は、いかに周りの人がうまく引き出してあげられるかでも変わっていくのだと感じた。保育者の仕事子どもたちの人生を左右するといっても過言ではないほど重要な役割と改めて痛感した。

A7 公開保育を通して子どもの興味・関心がどこにあるのか、ということを自分なりに常に考えるようになった。子どもたちが本当にやりたい活動なのか？保育者の思いだけで進めてはいないか、と考えることは、日々の保育の振り返りにもつながり、子ども一人一人の思いに今まで以上に寄り添っていききたいと思うようになった。

B 実践するさいの環境構成について

B1 (園長)「興味・関心から始まるプロジェクトアプローチとは」というテーマでの公開保育が決まってから、園全体で、また講師のアトリエリスタと何度も話し合った。

子どもも主体ということは、保育者にとって待つことも大切な要素だろう。子どもたちが共通のイメージをもっているいろいろなことを考えやってみたいという気持ちが育つよう、保育者は子どもたちの心に寄り添えるよう、環境を整えていた。

B2 (担任) 公開保育の日に聞いた印象深いたくさんの言葉(おはなし)は今も子どもたちの中に残っている。「またやりたい」という気持ちがあり、何かを描くこと、自由に作ることを楽しんだり、思いを伝えたくて手紙を出したり、といった活動が続いているので、いつでもできるように環境を整えている。

B3 公開保育の際、絵にはしづらい素話も多く語られたが、子どもたちは「こんな時はどうなるんだろう」「こんな色じゃないかな」と話しながら、瞳を輝かせながら描いてくれた。頭の中にあるイメージを言葉に代えて伝えてくれたことはとても嬉しかった。

公開保育を終えて、「子どもの力を信じてください」というアトリエリスタ（講師）の言葉を思い返している。「これは雨でね、雪になってね、雪で遊んだときの楽しい気持ちなんだ」と自分の作品を説明しながら、とても楽しそうに作品に取り組んでいた子の姿や、一枚の布を一生懸命に折ってリボンを作ろうとして、折り目が崩れてしまい悪銭苦闘しながらも、自分で工夫して取り組んでいる子どもの姿を見て納得した。

子どもの力を信じて見守ることが、子どもの自信につながっていくとを感じる時間だった。難しいけれども、保育者自身も柔軟性を持った考え方をしていかなないと子どもたちの姿を信じて見守る環境は整わないのではないかと思った。

- B4 子どもの言葉や日々の思いに自然な形で保育園全体で寄り添い、楽しみながらプロジェクトに取り組んでいることが伝わってきた。指導ではなく子どもの持っている力を引き出し、興味を持ったものごとを共に追求していくことで学んで行く方法の素晴らしさを学んだ。保護者に対しても「言葉」について懇談会等の機会を使って話をされていると聞いた。

園全体で取り組み、皆で確認し合いながら行っていたからこそ、大変だと感じる保護者に対しても根気よく働きかけていくことができるのだと園全体の姿勢、環境の素晴らしさを感じた。

C 保育者からみた、プロジェクト活動の過程での子どもたちの変化

- C1 二回めの公開保育で、子どもたちは「今の自分はどんなきもちだろう？」と真剣に考えてから制作していた姿が印象的だった。私がすぐに作り始めようとする、隣に座って絵を描いていた男児が、「まず考えるんだよ」「どんな風に作ってもいいんだよ」と教えてくれた。友達と同じでなくてよい、自分の気もちとじっくり向き合い考える時間を大切にする、どんなモノを作っても皆が受け止めてくれる、という安心感の中で表現することが保育の中で積み重ねられてきたのがわかった。

- C2 子ども一人一人の違う表し方、その表現力、発想力に感心した。

最初アトリエリスタ（講師）からレッジョ・エミリアの教育の話聞き、そこでは子どもたちが表現することが最大限に尊重されていることを知ってとても興味をもったが、この保育所においても、プロジェクトの過程で子どもたちが、声や音も絵で表現しようとする姿とその作品に見られるみごとな感性を見て驚いた。

- C3 2回目に会ったこどもたちの顔がとても輝いて、のびのびと自信に満ちた表情だったことに驚いた。子どもたちの中から溢れてくる言葉を拾い集め、子どもの様子に合わせながら保育を進めて行く中で、子どもたちそれぞれにこんなにすてきな表現力が

あるのだ、ということに驚きと感動を覚えた。

アトリエリスタ（講師）と担任の気づき

「ことば」のプロジェクトが進むにつれ、子どもたちは「相手がいるからいろんな気もちになるんだ」と気づくようになった。

また、「今日の気持ちは？どんな色？どんなかたち？」と尋ねても、子どもたちはその気持ちをためらわずに造形的に表現してみようとしていた。

一方で言葉の音の響きにも興味があり、クラスの合言葉「コンクリートリート」（意味は不明）が生まれたりもした。

また、秋になって「（こないだお散歩に来た時と比べて）はっぱの色が変わった」「風が色を変えてるんだね」「はっぱが同じ色の仲間を集めてるんだ」等々、気づいたことを言葉で表そうとすることが増えた、と実感した。例えば雨に語りかける子たち「お～い雨さん！なんで雨がふるの」、「星と雲は友達なんだけど、けんかして涙が出てきたって・・・、雲が太陽を隠しちゃったから、宇宙が雨をふらしたんだよ。おひさまが寂しいと泣くんだ。畑や虫のために雨はふるんだ」等々、担任はそうした子どもたちのことばを拾い集め続けて、子どもたちの言葉の表現が豊かになってきたことを実感することができた、と公開保育の際に語った。

初めは「ことばで表す」とは、手話や素話、歌や詩、日頃の会話・・・どれも言葉につながり、どう広げていけばいいのか難しく感じていたが、実際には今のままで子ども主体で子どもと作り上げていく楽しさを感じながら言葉で表す活動を進めることができた。

子どもたちは歌を絵で表現したり、聞いたことを体で表現したり、言葉を形にしたり、たくさん話し合いを重ね、いろいろな表現を経験したことで、自由に表現する楽しさを感じられるようになってきていたようである。

子どもが理解したことをどのように表現するか、支援していくのが私たち保育者の役割であると実感した。

結果・考察

筆者がアトリエリスタのような関わりかたで、子どもたちと保育者と共に実践してきた「プロジェクト」活動は、それぞれの園で子どもたちの興味・関心から見出だされたテーマをクラスあるいはグループで共有し、対話を重ねながら様々な体験を試し、認識を深めていくプロセスであった。

本論で取り上げた2つのプロジェクトについても、担任保育者は子どもたちがどんなことに興味をもっているか、それにどうアプローチして理解していくのか、子どもたちの対話や表現されたものから理解しようと努めていた。

レッジョ・エミリアでも尊重されている「対話」を、筆者は保育者の誘導的な対話ではなく、「素材」との対話、ものごとに対する保育者と子どもたちとの対話、子ども同士の対話、また子ども一人ひとりが自分の内面と向き合う対話と捉えて、できる限り大切にしよう努めた。

その結果、子どもたちは、知識を断片的に保育者から聞くのではなく、仲間と体験したことから理解し、自ら学ぼうとする姿勢を身につけていく様子が見られた。そして一人一人の子どもの表現がダイナミックに変化していったことは、今回参加した多くの保育者たちの意見・感想から確認することができた。

公開保育を通して、今まで頭ではわかっていたつもりだったが、子どもの声に耳を傾ける、子どもが自分たちで考え、試行錯誤するプロセスを実際には待てない自分に気がついた、また子ども自身に素晴らしい自ら学ぶ力があることに気づいた、と述べた保育者が多かったことも事実である。

今回各保育園の4～5歳児クラスにおいて、結果的に見れば多様な造形的作品や身体的あるいは音楽的表現、劇的表現などが生まれたが、もちろん「作品を作りあげる」ことを目指してきたわけではない。子どもたちが共有しているテーマを子どもたちが主体的に探求しようとする過程で、自ら試してみたいこと、表現してみたいことが自然に生成していったのである。

保育者は、子どもが考えたことに共感しつつ、保育者としての経験を生かし、子どもがもっている願いの実現を果たそうとし、その過程で子ども一人ひとりの社会性の発達や認知の援助を図ろうと努めた。

これは、予め立てられた保育指導計画によって、保育者が子どもたちを意のままに操る保育のイメージではなく、子どもと共に遊びの仲間として対話し、子どもの考え方を生かしながら共に進んでいく保育の形態であったと考えられる。

レッジョ・エミリアでは、表現活動の意味を、言語化できない内面を表現することであると限定的に捉えてはいない。それだけでなく幼児期の子どもの感覚器官の発達を促し強化すること、また表現によって自分の内面を意識し、それを自己の物語として考察することが、言語の発達や認知面で大きな意味をもつ、と考えられている。筆者も保育者もその点を理解して実践した。

今回は予算面や人的配置、保育者の勤務時間内での活動時間に限りがあり、ドキュメンテーションの部分では不足している点多かったと反省している。今回のプロジェクトの結果を踏まえて、今後も保育者主導ではなく、子ども主体で造形的、音楽的、身体的、の自由な表現活動に取り組んでいきたい。

レッジョ・エミリアの幼児教育を推進してきたローリス・マラグッツィが生前よく言っていたそうだが、「子どもたちは手を通して考える」のだ。手を通して考える環境の保障は、今後更に必要であろう。

【参考文献】

- 「子どもたちの100の言葉」C.エドワーズ /L.ガンディーニ /G.フォアマン編 世織書房 2001
- 「プロジェクト型保育の実践研究」 角尾和子 北大路書房 2008
- 「驚くべき学びの世界」レッジョ・エミリアの幼児教育 佐藤学監修
ワタリウム美術館編 2011
- 「レッジョ・エミリア 保育実践入門」J.ヘンドリック編著 北大路書房 2000
- “REGOLAMENTO SCUOLE E NIDI D'INFANZIA del Comune di Reggio Emilila” 2014
- “CHILDREN,ART,ARTISTS” REGGIO CHILDREN 2003
- “MOSAICO di GRAFICHE PAROLE MATERIA” REGGIO CHILDREN 2015 他

